満蒙開拓平和記念館構内の三つの石碑

平和友好の石碑… 1p

鎮魂の石碑 …… 6p

御製の石碑 …… 10p

2019年4月

満蒙開拓平和記念館

飯田日中友好協会

2019.04 改

Ⅰ　平和友好の石碑

文責／飯田日中：小林 勝人

満蒙開拓平和記念館の「平和友好の石碑」建立の思い

満蒙開拓平和記念館に「どっしりとした」大きな「平和友好の碑」がある。これは、飯田日中友好協会が創立 50 周年の記念事業の一環として、阿部守一長野県知事の揮毫をいただき、満蒙開拓平和記念館の目指す「平和の象徴」として、県内の各地区日中友好協会の賛同を頂き、2013年10月、満蒙開拓平和記念館構内に建立したものである。

（平和友好の碑に寄せる思い）

中国黒竜江省の「方正地区日本人公墓」境内に、今回建立の碑と同様の「和平友好の碑」がある。これは、戦後50周年記念事業として1995年に「長野県開拓自興会・信濃教育会・長野県日中友好協会」の三団体により、長野県知事揮毫により建立したものである。

1972年9月29日、日中両国の首脳は日中共同声明に調印し、日中国交正常化が実現した。この交渉の初日（9月25日）、歓迎の挨拶で周恩来首相は、半世紀にわたる中国侵略によって日中両国民が損害を受けたことを指摘し、「前事不忘・後事之師」（前の事を忘れることなく、後の戒めとするべきだ）と発言した。これに対し、日本人にはかなり普遍的な和解の習慣として「過去は水に流す」という対極的な言葉がある。

また、ヴァイゼッカー元ドイツ連邦共和国大統領が、終戦40周年を記念しておこなった演説の中で「過去に目を閉ざすものは、現在に対に対しても盲目である。非人間的なことを記憶することを拒むものは、だれであれ、新しい伝染病にかかりやすい」と指摘した。

この東西の被害者・加害者の二人の言葉から、私たちは「歴史を学ぶことの大切さと、記憶を保つことの大切さ」を学び、実践する証として、記念館の目指す平和のシンボルとしての「平和友好の碑」の台石に「前事不忘・後事之師」」を刻んだのである。

（添付説明）

文責／飯田日中：小林 勝人

平和友好の碑の台座に刻まれた「前事不忘・後事之師」の文字

１９７２年９月２９日、日中両国首脳は、５日間にわたる厳しい交渉のあと合意に達し、日中共同声明に調印、戦争状態の終結と日中国交の正常化を実現させ。最大の難題のひとつだった日本の侵略戦争に対する謝罪が、次のように前文に明記されました。

日本側は、過去において日本国が戦争を通じて中国国民に重大な損害を与えたことについての責任を痛感し、深く反省する。

この日中共同声明の「謝罪」にいたる交渉では、文化的・政治的背景の異なる日中首脳が、その違いを乗り越え懸命に合意に向けて努力しつづけます。この「小異を残して大同を求める」両国の政治家や官僚たちの苦闘する姿は、きわめて興味深く感動的ですらあります。しかし、その「合意」の裏（底）にひそむ日中間の違いは、必ずしも「小異」ではありませんでした。交渉初日の９月２５日、歓迎の宴席において、日中両国の首相がそれぞれ、挨拶に立ちました。

周恩来首相は、半世紀にわたる日本軍国主義の中国侵略によって、日中両国人民が損害を受けたことを指摘、「前の事を忘れることなく、後の戒めとする（「前事不忘・後事之師」）」と、すべきだと挨拶しました。

田中角栄首相は、これに対して、次のような挨拶を返しました。

「過去数十年にわたって日中関係は遺憾ながら、不幸な経過を辿って参りました。この間、わが国が中国国民に多大のご迷惑をおかけしたことについて、私はあらためて深い反省の念を表明するものであります。しかしながら、われわれは過去の暗い袋小路にいつまでも沈淪することはできません。私は今こそ日中両国の指導者が、明日のために話し合うことが重要であると考えます」。

この「迷惑（添了麻煩）」発言のとき、拍手はとだえ中国側はどよめき、緊張感が走りました。

周恩来挨拶のキーワードが「前事不忘・後事之師」だとすれば、田中角栄のそれは、前段が「迷惑」と「反省」、後段が「過去」と「明日」となります。この前段の「ご迷惑をおかけした」との発言が、発言と同時に中国側に強い反発を引き起こし、後に「迷惑事件」として記憶されることとなります。ここではまず、両者の挨拶で好対照となった考え方の違いについて、取り上げます。

周恩来の「前事不忘・後事之師」と田中角栄の「過去」「明日」発言についてです。

周恩来は、未来のために過去を忘れるな、といったのです。これに対して田中角栄は、過去は忘れて未来を語ろう、と返しています。

このことについて竹内好（よしみ）は、日中国交回復直後に書いたエッセー『前事不忘・後事之師』（「中国を知るために」第三集所収）に、次のように書いています。

…「過去を問わぬ、過去を水に流す、といった日本人にかなり普遍的な和解の習俗なり思考方法なりは、「普遍的なオキテではないことを心得て、外に向っての適用は抑制すべきである。」…。

漢民族は、伝統的に記録を大切にする民族である。たとえ自分に不利なものでも、後世の史家の判定にゆだねるために記録を保存する習性がある。」

竹内の指摘した「過去を水に流す」という日本人の習性は、後々まで変わることなく引き継がれ、今日まで至っています。共同声明の「反省」の延長上にある「河野談話」や「村山談話」がいま、「過去を水に流す」ことを恥じない政治家たちによって、見直されようとしています。

そして、田中の「迷惑」発言。交渉で問題となったのは、こちらのほうでした。

２日目の首脳会談冒頭、周恩来は厳しく批判しました。

「田中首相の「過去の不幸なことを反省する」という考え方は、我々としても受け入れられる。しかし、田中首相の「中国人民に迷惑をかけた（添了麻煩）」との言葉は中国人の反感をよぶ。中国では添了麻煩（迷惑）とは小さなことにしか使われないからである。」

竹内好（よしみ）は、「迷惑」は軽すぎるが「麻煩」はもっと軽い。…「麻煩」…は、人に迷惑をかけたときにも使えるが、そのほかに自分がめんどうくさいとき、または処理しにくい状態の形容などにも使えるアイマイ語である。よりによって、こんなアイマイ語に訳したところに、日本外務省の頭の程度があらわれているのかもしれない」と憎まれ口を叩いている。(『迷惑』「中国を知るために」第三集に所収)。

では外務省は、どのような意図で田中挨拶に「迷惑」という言葉を選び、しかもその中国語への翻訳を「麻煩」としたのか。田中挨拶の原稿を書いた外務省・中国課長の橋本恕は、２００８年の服部龍二氏のインタビューに、次のように答えています。

「日本が敗戦国で、中国が戦勝国だということは、みんな理屈ではわかっている。けれど日本人の大多数は、その当時も現在も、アメリカと戦争して敗けたのだと思っている。中国と戦争して敗けたと思ってないのだよね。日本軍が中国にひどいことをしたと率直に認めなければならんけれどね。しかし、日本民族の矜持をなんとしても保てる努力がしたい。そういうつもりで書いているものだから、大平外務大臣も、田中総理も、まったく修正しなかった。」(服部龍二著『日中国交正常化－田中角栄、大平正芳、官僚たちの挑戦』中公新書　２０１１刊)

過去を水に流した日本人は、２０数年前の史実にすら、頬被りをして直視することを怠った、ということでしょう。外務官僚はそのように考え、「迷惑」(「麻煩」) という言葉を確信的に使ったのです。日本民族の「矜持」も、「迷惑」(「麻煩」) という言葉と同様に軽く、地に落ちたというべきです。

周恩来の「迷惑」(添了麻煩) 発言批判に対して、田中がただちにおこなったという釈明内容が、本人の帰国報告や同席した中国側要人の回想録から、明らかになっています (ただ、外務省記録にはない)。

田中の釈明。「ご迷惑をかけたという日本語の意味は、"ごめんなさい"という程度のも

のではない。私は誠心誠意を込めて、申し訳ないという心情をそのまま表現した」。

姫鵬飛外相の回想。「田中は、「日本語で『ご迷惑をかけた』とは誠心誠意の謝罪であり、これからは同じ過ちは犯さないので許してほしいという意味である。より適切な言葉がおありなら、あなた方の習慣によって改めてもよい」と釈明した」。（この項、服部龍二著『日中国交正常化』から）

この田中釈明は、①「迷惑」という言葉の意味は日本語と中国語で異なっていること、②日本語の「迷惑」は、「非常に強い気持ちで反省しているときにも使う」ということ、さらに③中国語に適切な言葉があれば、中国の習慣に従って書き改めてもよい、とまで発言したことを明らかにしています。「ご迷惑をおかけした」という日本語が、はたして、例えば「三光作戦」（殺しつくし、焼きつくし、奪いつくす）の犠牲者に対する謝罪の言葉として、適切か否かは、論ずるまでもありません。日本語の「迷惑」よりもやや軽いという「添了麻煩」という翻訳が、必ずしも誤訳だったとは思えません。しかし、中国研究家の矢吹晋氏は、「迷惑」という日本語に「誠心誠意の謝罪」という意図を込めた田中の真意が、周恩来はじめ中国側に正確に受け止められ、ついに侵略戦争に対する謝罪問題は解決した、と指摘しています。（矢吹晋稿『日中相互誤解の濫觴（ﾗﾝｼｮｳ）－闇に消えた田中角栄・毛沢東会談の真実』より）

「迷惑問題」は一見落着し、９月２７日の田中・毛沢東会談（毛沢東による接見）では、次のようなやり取りが交わされました。（上記の矢吹論文より）

毛主席：あなたがたは、あの「添了麻煩」問題は、どのように解決しましたか。

田中首相：われわれは中国の習慣にしたがって改めるよう準備しています。（いうまでもなく共同声明に盛り込む文言を指している－矢吹氏の注）

毛主席：若い人たちが、ご迷惑（添了麻煩）をかけたという表現は不十分だといってきかないのですよ。中国では女性のスカートに水をかけたときに使うことばですから。

田中首相：日本ではことばが中国から入ったとはいえ、これは万感の思いをこめておわびするときに使うのです。

毛主席：わかりました。迷惑のことばの使い方は、あなたの方が上手なようです。

こうして毛・田中会談は終了し、別れ際に毛沢東が『楚辞集註』（ソジシッチュウ）６冊を、田中に贈りました。この贈り物の意味を矢吹は、次のように解釈しています。

「この本には、「迷惑」という二文字の中国における古典的な使用法が示されている。中国語「迷惑」の意味は、現代においても変わっていない。毛沢東は、日中両国の文化がかくも異なったものであることに興味を感じたからこそ、中国文化における「迷惑」の使い方の一つの証拠として、この本を贈り物に選んだのではないか。」（手元の中国語辞典では、「迷惑」mihuo まどう、まどわす、魅する、とあります）

また矢吹は、この本のタイトルが沈尹黙という著名な近代の書法家によって書かれたものであることから、『楚辞集註』贈答の意味を、さらに深読みします。

「沈尹黙は青少年時代に２度も日本に遊学しており、さらに抗日戦争期における行動も含めて、この人物もまた中日文化交流の深さを体現する人物の一人である…。こうして『楚

辞集註』という贈物は、日中両国の文化交流と摩擦を象徴するものとして選ばれたのではないか」。しかも、これだけ深い思い入れ込めた贈り物にかかわらず、中国側は一切このことに触れずに手渡したことを、矢吹氏は、「まことに「東洋的」な優雅な作風というべきである」と賞賛します。

こうした交渉経過を見ていくならば、田中角栄と大平正芳、毛沢東と周恩来、これら日中両国首脳の日中国交正常化にむけた並々ならぬ決意と情熱を、強烈に感じます。その両者の情熱と決意が、共同宣言前文の侵略戦争謝罪の文章へと結実したことを、私たちは想起すべきです。再び、前文の謝罪文を記します。

日本側は、過去において日本国が戦争を通じて中国国民に重大な損害を与えたことについての責任を痛感し、深く反省する。

日本の侵略戦争謝罪と両国の和解から４０年、私たちはあらためて、「前の事を忘れることなく、後の戒めとする」（『前事不忘・後事之師』）の教訓を、心に深く刻まなければならない、と強く確信します。

（付記）

広辞苑では,「迷惑」は、①どうしてよいか迷うこと。②困り苦しむこと。難儀すること。③他人からやっかいな目にあわされて困ること。と３つの意味が付されています。

「ご迷惑をおかけした」は、第３義にあたります。やはり、日本語常識から考えて、「誠心誠意の謝罪」というのには、いささかの無理があります。４０年前の日中国交正常化交渉の中国側スタッフには、日本語に堪能な人たちが多数いたことは、間違いないと思います。ここは、毛沢東・周恩来サイドの譲歩と妥協があったと考えるべきでしょう。そして、田中・大平が、「迷惑」発言から出発しながらも、度重なる交渉のすえ、「責任を痛感し、深く反省する」と決意するにいたったことの意味も、やはり重いものとして記憶されるべきでしょう。侵略の歴史とともに、この田中・大平の決断こそまさに、『前事不忘・後事之師』の精神で、今思い起こすべきだと思います。

（以上、この項終わり）

写真　１０㌧の台座に据え付け中の平和友好の石碑

Ⅱ 鎮魂の石碑

文責／飯田日中：小林 勝人

鎮魂の石碑建立の経緯について

満蒙開拓平和記念館が、2013 年 4 月開館以来、毎年８月中旬には「鎮魂の碑」を取り囲んで、追悼式典を執り行っている。この日には、満蒙開拓団関係者をはじめ、多くの関係者が集まり、日中双方の犠牲者に対し、「不再戦」を誓い、犠牲となった人たちの御霊に心からの追悼を行っている。

この鎮魂の石碑は、飯田日中友好協会会員「林 善清」さんの寄贈によるもので、碑への揮毫は高森町の隣政寺壬生照道住職によるものである。

写真は「鎮魂の碑」を建立する 林 善清 夫妻

林さんの、「鎮魂の碑」の建立に当たって、「二度と再び悲惨な歴史を繰り返してはならない」という、強い思いがあったことを知り、ご本人の心情を思い、建立の経過を記しておきたい。

林 善清さんは、飯田市千栄に昭和 11（1936）年 11 月、父「伊六」、母「ふき」の長男として生まれた。私たちが、林 善清さん を知ったのは、戦後 50(1995)年の頃で、「林鉄筋」の社長をされていた。そして、社長をされる傍ら、石工芸の大家で、鉄筋工場の周りには大きな石像が並んでいた。また林社長は、飯田日中友好協会の「法人会員」として協会活動に気さくに参加され、何度か中国友好訪問団にご一緒してくれた。そんななか、林さんは１０歳（小４）のときにお父さん（伊六氏）を亡くされたことを知りました。伊那谷では、昭和大恐慌に続き、山村の千代村では、集団分村開拓団を満洲に送り出した。

当時、善清少年は英霊となった兵隊さんの村葬、野辺送りが行われるという時代のなかで成長した。こうした無謀な戦争の中で、お父さん（伊六氏）は、戦争の犠牲となり、尊い肉体を傷つけられ、兵役除隊後、教職を目ざして傷痍軍人教員養成所に進み、昭和１８年４月には、故郷の千代国民学校の教師となられた。しかし、傷ついた身体は完治することなく、教員生活も存分に発揮し得ないまま、帰らぬ人となってしまったという。

父、伊六氏は、小学校の恩師で歌人の「橋爪丘の人」先生との出会があり、折にふれて、歌作りに励んでいたという。

こうして、１０歳で父を亡くした林善清さんは、長い間心の中で温め続けていたお父さんの遺歌集『ほととぎす』を 2002 年に出版した。頂いたこの遺歌集により、改めて善清さんをはじめ林家の皆さまのご心情を知ることとなった。

下記に、「林 伊六」氏の略歴（プロフィール）を記しておきます。

林 善清さんの父、「林 伊六」氏の略歴（プロフィール）

明治 44(1911)年 11 月飯田市千代村千栄にて、父杢一 母ちかの長男として生まれる。昭和 6(1931)年 12 月東京赤坂近衛歩兵三聯隊に現役兵として入隊。昭和 8（1933）年 6 月満期除隊。昭和 9(1934)年 12 月福与ふきと結婚。昭和 11（1936）年 11 月長男善清生まれる。昭和 12(1937)年 9 月日支事変（日中戦争）のため、東京青山の近衛歩兵四聯隊に召集兵として入隊。同年 11 月渡支、戦闘に参加。昭和 14(1939)年 8 月中支武漢三鎮にて敵砲弾の破片を右上膊に受け損傷漢江野戦病院に収容。同年 12 月千葉陸軍病院に送還転院する。昭和 15(1940)年治癒退院兵役除隊。昭和 16（1941）年金沢師範学校傷痍軍人教員養成所入学。昭和 17（1942）年 7 月金沢師範学校教員養成所を優秀な成績で卒業。 昭和 18（1943）年 4 月母校の千代尋常小学校訓導を拝命。二年生を受け持つも２学期より体調を崩し休職。療養に専念。昭和 21（1946）年 4 月 14 日帰らぬ人となった。 享年 34 歳。（なお、この時、長男 善清 10 歳、二男 6 歳、長女 2 歳。）

付記 1．父「伊六」の命名について、

遺歌集によれば、祖父母は子宝に恵まれず、結婚６年目の時、大平峠を徒歩で往復し、伊勢神宮参拝を勧められて参拝をした。

その御利益があったのか、明治４４年の初夏に男子を授かった。伊勢神宮の「伊」を頂き、６年目にして生まれたことから、「伊六」と命名されたという。

また、父「伊六」は、大正１５年３月千代尋常小高等科を卒業後、恩師「橋爪丘の人」先生（歌人）の指導を受け短歌を趣味とするようになり、折に触れ歌を作り、生涯に亘って続いたという。また、教員養成所の卒業式では、卒業生総代で答辞を読んだ。

付記２．千代尋常小学校当時の生徒「萩本育夫」氏の手記（全文）を参考に掲載する。

＊　＊　＊　＊　＊

林伊六先生の思い出　　萩本育夫

昭和十八年四月、千代国民学校の二年生になった私たち東組の担任の先生は、林イロクというちょつと変わった名前の先生でした。少し小柄で、細身の背筋がピンとしたやや年配の感じの男の先生で、右手は不自由でした。何でも、戦争に行って敵の大砲の弾で大怪我をして右手の自由を失ったと聞きました。いつも落ち着いた物静かな先生で、大きな声で子供たちを叱ったりするようなことはなかったけれど、子供たちにとってはどことなく威厳のようなものを感じる先生でした。

１）二年生の資格

先生は時々、私たちに戦争の話をしてくれました。内容はほとんど忘れましたが、勇ましくカツコイイ兵隊さんの話ではなくて、むしろ戦場における兵隊さんの苦労話が主だっ

たように思います。腕白盛りの小学二年生も静かに聞いておりました。

ある日先生は、戦場で負傷したり病気になったりした兵隊さんたちを収容している野戦病院の様子を話してくれたことがありました。大怪我がもとで尿が出なくなってしまい、そのために大変に苦しがっている兵隊さんがいたというのです。「そんなときはなあ、軍医さんがその兵隊さんのオチンチから管を入れておしっこを出してやるんだぞ。その痛いことといったら、いくら強い兵隊さんだって、涙をぼろぼろ流して我慢しとるんだぞ。」と、話してくれたのです。

ところが、それまで静かに聞いていた男の子たちがオチンチという言葉を聞いた途端、わーっと沸きました。無理もありません。当時の田舎の子供たちにとってオチンチとかオナラとかいう言葉はとても興味のある言葉ですが、二年生ともなれば公の場で使うにはある種の憚（はばか）りも必要であることを認識し始める年頃です。ところがこともあろうに、それが先生の口から出たということ、しかもオチンチの穴に管を入れるという子供にとっては思いもよらぬ奇想天外な行為が興味を煽り、それまでの緊張感が一気に崩れて笑い声となったわけです。

その時先生は、穏やかな声で腕白坊主たちを諭されました。「お前たちなあ。この兵隊さんの辛い気持ちが分からんのか。そんなことじゃ、二年生のシカクなんかないぞ。」と。私たちは、静かな、そして真剣な先生の眼から、みんな何かいけないことをしたのだと悟ってシーンとなったのでした。

ところで先生がこのときおっしゃった、「二年生のシカク」って何だろう？四角なら分かるが、二年生の四角なんてどういうこと？と、この時から私にはこの「シカク」という言葉がその後の宿題になりました。「シカク」が「資格」であることは、中学生になって分かりました。しかし、中学生の資格、高校生の資格、社会人の資格、教員の資格などなど、この「資格」の中身（人間的条件）については今もって満足な答を出せずにいます。小学二年生の時に頂いた林先生からの宿題ですが、六十年後の今もまだ納得のいく回答を書けずにいる不肖の教え子です。

１）一日千枚の習字練習

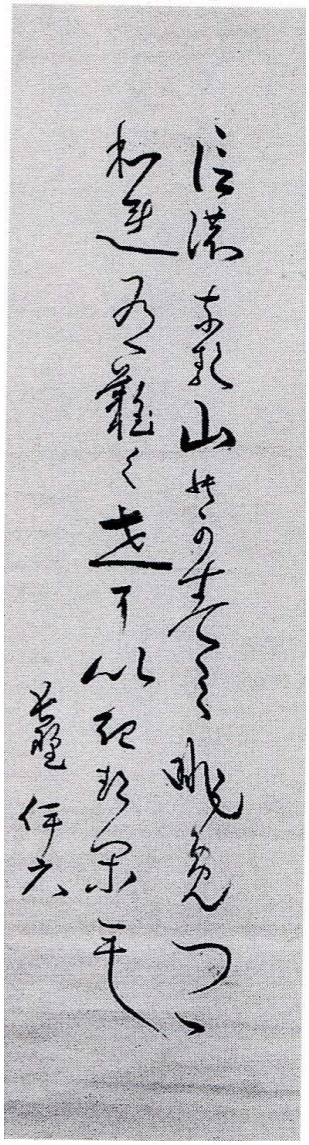
利き腕の不自由な先生の板書は、当然のことながら左手でした。でも少しも不自然なところがなく、それどころか他の先生方よりよほどきれいな文字であることが私にも分かりました。そして習字の時間。（当時は小学二年生にも習字の時間がありました）先生は、穂先に適量の水を含ませた太い筆を持つと、黒板の上にお手本の文字を書きました。その墨痕（いや、水痕）の鮮やかなこと！。そうです。上手な整った字というものは、たとえ小学二年生だって感動を与えるのです。どうして左手でもあんなにうまく書けるのか、と。あるとき私は、「どのくらい練習したら、左手であんなにうまく書けるようになるのですか」と先生に尋ねました。先生はちょっと考えてから、「そうだな、毎日千枚ぐらいは書いたと思う。」と答えてくれました。そうか、毎日千枚か！当時の私にはその練習の厳しさまでは想像出来ませんでしたが、千枚という数が並の数でないことだけは理解することが出来ましたから、益々先生を尊敬するようになりました。

2）あとがき

ところが夏休みが終わって二学期が始まったとき、担任は若い女の先生に代わっていました。林先生は病気になられた、ということでした。以後、先生には一度もお目にかかることはなく、それから二年八ヵ月後の五年生になった四月、私はお宅で行われた先生のお葬式に友達と、お参りして最後のお別れをしました。林先生に担任としてご指導頂いたのはたった四ヵ月余という短期間ではありましたが、私がこれまでお世話になった多くの先生方の中で、最も印象に残る「真の教育者」のお一人でした。この拙文を先生の遺稿集に載せて頂くご縁を感謝し、先生のご冥福をお祈り申し上げます。　　合　掌

■ 註、『林 伊六遺歌集」は、満蒙開拓平和記念館にありますので、お読みください。

（以上この項は終わり）



軸「信濃奈類山能可春ミ眺免つ、和連有難く世尓以起類閑毛」は伊六の左手による揮毫

林伊六遺歌集『**ほととぎす**』より三首引く。

新しき花びくつけし幼女の餅草をつむおぼつかなき手よ

月のぼり障子にうつる桑の葉の落つる影して音かすかなり

静かなるうすくらがりの朝空を山ほととぎすなき渡るなり

Ⅲ 御製の石碑

御製碑について

文責／飯田日中：小林 勝人

平成２８（２０１６年）１１月１７日天皇・皇后両陛下は、個人的な旅行として、「満蒙開拓平和記念館」にご来館された。天皇陛下はすでに「生前退位」の意向を、平成２８年８月８日に、ビデオメッセージの形でお気持ちを述べられた。その三ヶ月ほどして、私的な旅行で「満蒙開拓平和記念館」に、ご来館された。

「満蒙開拓平和記念館」を訪問された、天皇・皇后両陛下は、館長はじめ寺沢副館長、三沢事務局長のご案内で館内を見学された後、寺沢副館長（開拓団員子息）と共に「体験者（語り部）３名」から当時の様子をお聞きして懇談された。

〈写真：初代館長「河原 進」揮毫による御製碑〉

（体験者３名の方々）

○ 「桜井　こう」さん（面談時／ 92 歳）大正 13（1924 年）8 月生、水曲柳開拓団員、昭和 19 年 1 月結婚・渡満、昭和 21.10 帰国、夫シベリア抑留、昭和 23 年 6 月帰還。長男が避難先で昭和 21 年 5 月病死。

○ 「久保田 諫」さん（面談時／ 86 歳）昭和 5（1930 年）1 月生、河野分村開拓団員、昭和 19 年 5 月渡満。昭和 23 年 7 月引揚。昭和 20 年 8 月 16 日深夜、吉林省現地で 72 名が集団自決（奇跡的に 2 名が生存、内 1 名は引揚途中に死亡）。

○ 「湯沢 政一」さん（面談時／ 86 歳）昭和 5（1930 年）2 月生、青少年義勇隊三江義勇隊両角中隊、昭和 19 年 3 月内原訓練所入所、昭和 20 年 3 月卒業と同時に渡満。三江訓練所に入所。敗戦後は桃山小学校の収容所等で一冬を過ごし昭和 21 年 10 月引揚。

■ 懇談会を終わったあとの語り部三人の感想。

天皇(皇后)陛下からは、熱心に私たちのお話しをお聞きいただきました。と、語り部三人から　感激した様子で話しがあり、陛下から**「このような歴史を長く語り継いでいってほしい」、「こういった皆さんのご苦労により、戦後の日本が築かれてきたんですね、この平和を大切にして下さい」**とお言葉がありました。との報告がありました。

このあと、記念館を去る際にも「この歴史をしっかり伝えていって下さい」と記念館のスタッフや、飯田日中関係者等にも念を押されてつぎの会場に向かわれました。

■ 御製碑の建立

ご訪問一年後の平成 29（2017）年 11 月、満蒙開拓平和記念館構内に阿智村、飯田日中友好協会、満蒙開拓平和記念館の 3 団体による「御製碑」は、初代館長「河原 進」氏の揮毫により建立され（写真）、平成 29　年 11 月 23 日、一般公開された。

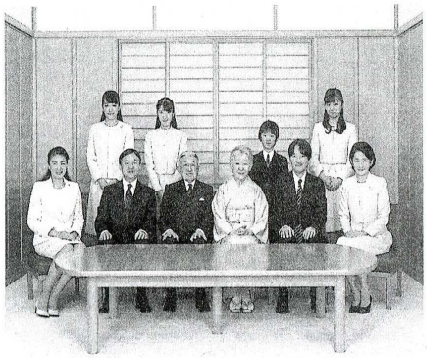
■ その他

宮内庁は新年にあたり（平成 29（2017）年 1 月 1 日）天皇皇后両陛下が昨年一年間に詠んだ 御製から両陛下が選んだものを発表した。天皇陛下が宮内庁を通じて毎年公表してきた「新年にあたってのご感想」は、公務負担軽減策の一環で今回から取りやめた。発表された歌は天皇陛下が、5 首、皇后さまが 3 首それぞれ印象深かったことが詠まれている。そのなかで、阿智村の満蒙開拓平和記念館をお訪れた際の御製と、長野県で行われた第67回全国植樹祭の際、詠まれた御製も含まれている。（下記朝日新聞参照）

2017 年 1 月 1 日付　　朝日新聞

両陛下 被災地思う歌

「ご感想」は取りやめ



新年を迎える天皇ご一家＝宮内庁提供

宮内庁は新年にあたり、天皇、皇后両陛下が昨年1年間に詠んだ歌から両陛下が選んだものを発表した。天皇陛下が同庁を通じて毎年公表してきた「新年にあたってのご感想」は、公務負担軽減策の一環で今回から取りやめた。

天皇陛下は、東日本大震災後、被災3県で初めて開かれた岩手県での国民体育大会で、犠牲者に黙禱した開会式の様子を詠んだ。また、長野県阿智村の満蒙開拓平和記念館を訪れた際の歌もある。

皇后さまの熊本の被災地についての歌は、「果たして自分などが見舞うことが出来るだろうか」とためらいつつ、それでも「人々の傍らに」という天皇陛下の気持ちに添って訪問する心情を詠んだものだという。

両陛下は、2日に皇居での一般参賀で皇族方と宮殿のベランダに立つ。

（多田晃子、島康彦）

◇

発表された歌は、天皇陛下が5首、皇后さまが3首で、それぞれ印象深かったことが詠まれている。

▽天皇陛下

〈第67回全国植樹祭〉

山々の囲む長野に集ひ来て人らと共に苗木植ゑけり

〈第36回全国豊かな海づくり大会〉

鼠ケ関の港に集ふ漁船海人びと手を振り船は過ぎ行く

〈第71回国民体育大会開会式〉

大いなる災害受けし岩手県に人ら集ひて国体開く

〈平成28年熊本地震被災者を見舞ひて〉

幼子の静かに持ち来し折り紙のゆりの花手に避難所を出づ

〈満蒙開拓平和記念館にて〉

戦の終りし後の難き日々を面おだやかに開拓者語る

▽皇后さま

〈1月フィリピン訪問〉

許し得ぬを許せし人の名と共にモンテンルパを心に刻む

〈被災地　熊本〉

ためらひつつさあれども行く傍らに立たむと君のひたに思せば

〈神武天皇2600年祭にあたり橿原神宮参拝〉

遠つ世の風ひそかにも聴くごとく樫の葉そよぐ参道を行く

発表された長野県に関係する歌

○満蒙開拓平和記念館にて

戦の終りし後の難き日々を
面おだやかに開拓者語る

○第67回全国植樹祭

山々の囲む長野に集ひ来て
人らと共に苗木植ゑけり

■ 参考（歌会始と満蒙開拓平和記念館）

新年恒例の「歌会始の儀」は、1 月１０日前後に皇居正殿「松の間」において開催される。歌会始では、最初に一般からの入選者 10 名の歌が古式ゆかしく披露され、続いて選者、召人の歌が披講され、皇族方の歌、皇后陛下と続き最後に天皇陛下の御製が二回詠み上げられる。

一般から寄せられた二万首を超える歌は、５名の選者により選考がされる。今年（2018 年）の御題は「語」。この５名の選者の中に、歌人「三枝昂之」氏がおられる。三枝氏は、前年の 2017 年 6 月 11 日、「満蒙開拓平和記念館」を見学された。翌 2018 年の歌会始において、阿智村の「満蒙開拓平和記念館」を見学された時の感慨を御題「語」に詠まれた。その時の歌が披露された。（下記）

○ 語ることは繋ぎゆくこと満蒙といふ蜃気楼阿智村に聞く

歌会始の行事は松の間の儀式のあと、別室で両陛下は、例年選者と、また入選者との懇談の時間がセットされている。今年（2018）の選者との懇談の中で、三枝昂之先生からつぎのようなお話しがあった旨、ご連絡をいただいた。

今年（2018）、歌会始の行事は松の間の儀式のあと、別室で選者と両陛下が短い懇談をする時間がありました。

そこで、満蒙開拓平和記念館のことも話題になりました。あの私的訪問は、皇后陛下美智子さまの強い要望によるもの、と陛下が説明してくださいました。阿智村は遠いから行くのが大変だったのでは、と皇后様は心配してくださいましたが、地元の方が案内してくださったので、といったやりとりもあり、楽しいひとときでした。

また、今年（2018）の入選者との懇談の中でも、飯田の入選者「塩沢信子さん」から、満蒙開拓平和記念館を訪れたことが話題になり、天皇陛下が記念館訪問時に詠まれた歌の碑が昨年 11 月に建立されたことを、お話しすると、陛下は和やかな面持ちで「そうですか」と応じられたという。こうした新年の「歌会始」の行事の席でも「満蒙開拓平和記念館」が、話題になったとの報告に、記念館関係者は大変に喜んでいる。

なお、選者の三枝昂之氏は、著書『昭和短歌の精神史（角川文庫、第 56 回芸術選奨文部科学大臣賞受賞ほか多数受賞 』の中で「満洲という幻想」として、執筆されておられ歌人の中でも短歌を通じて希な満洲史への歌論を持っておられる方で、山梨県立「文学館」の館長でもある。

「満蒙開拓平和記念館」関係者は、一昨年の天皇陛下のご来館に続いて、歌会始の選者「三枝昂之」の詠進歌によって、「満蒙開拓」の歴史が広く知られることとなり、大変有り難いと、あらためて感謝している。

さらに、飯田地方の歌会始の最近の入選者は、7 人いるが、その中で入選２回を数える久保田幸枝さんの歌（御題「光」、平成２２年入選）は、満蒙開拓の史実を通じて平和の尊さを発信し、語り継いでゆく満蒙開拓平和記念館として、大切にしなければならない伝える言葉の力を詠い込んだ歌として、この入選歌を下記に記載しておきたい。

○ 焼きつくす光の記憶の消ゆる日のあれよとおもひあるなと思ふ

入選者「久保田幸枝」さんは、樺太に生まれ、特に樺太（豊原）空襲に遭遇、続く引揚げなど戦争体験者として、また「三光作戦」・「満蒙開拓」に繋がる、「戦争の愚かさ、平和の尊さ」を普遍的に伝える表現を押さえた名歌である。といわれている。

（以上この項終わり）

＊　＊　＊　＊

■ むすびとして

以上「満蒙開拓平和記念館」に建立されている３つ石碑に触れてきました。

改めて、東西の被害者・加害者の二人の言葉を思い起こし、私たちは「歴史を学ぶことの大切さと、記憶を保つことの大切さ」を学び、実践する証として、記念館の平和のシンボルである「平和友好の碑」の台石に「前事不忘・後事之師」」を刻んであることを記して「むすび」とします。

（完）